

入園、昨年度過去最低

日本平動物園

施設改修に予算の壁

静岡市民に長年にわたり親しまれてきた日本平動物園（静岡市駿河区池田）。しかし、入園者数は減少傾向をたどり、施設の老朽化も進んでいる。全国各地の動物園が大幅な展示改革などで入園者を呼び戻すなか、園は「猛獣館」（仮称）などの整備構想を具体化させ始めた。職員らの意識を含めたソフト面での改革では一歩踏み出したが、懸案の施設改修には長い期間がかかるのは避けられない。公立運営ならではの予算の制約をどう乗り越えるのか。これからが再生への正念場となりそうだ。

「えさを運ぶ一輪車が人で進めないほどだった」と振り返る。レッサーパンダなど珍しい動物の来園、爬虫類園、熱帯鳥類館などが完成する度に盛り返し、90年代前半までは年間60万人台を維持した。

都市型動物園の年間入園者数の目安はその都市の人口とされ、旧静岡市の40万強の人口からみると人気ぶりがわかる。

だが、駐車場不足や交通の便の悪さ、施設の老朽化なども影響し、入園者数は減少し、昨年度は約44万人と過去最低だった。鈴木さんは「昔は動物園がただでお客さんは喜んでくれるだけでお客さんは喜んでくれた。最近は一広い所を走り回る動物がオリに入れられかわいそう」との声も聞かれる」と寂

しかった。

北原園長も「今は新施設や珍しい動物では効果が続いていない。昨年は千葉市動物公園のレッサーパンダ『風太』の生まれ故郷ということで、レッサーパンダのオリの前には5月から夏に人だかりができたが、既に落ち着いた」と話す。

■歴史

日本平動物園は、静岡市制80周年記念事業として1965年、建設計画が持ち上がった。反響は大きく、市内の子供たちによる「1円募金」などの寄付が多く集まり、69年8月1日、

123種377匹の動物を輸入して開園。現在は約180種700匹を飼育し、園内百種の動物園となっている。

開園初日には約3万人が入園するなど、初年度には約83万人が園を訪れた。開園時から飼育係を務める鈴木和明さん(55)は

こうした状況を打開しようとして、園は98年3月に「動物園（新）整備基本計画」を作成。しかし、合併や政令市移行などで計画は頓挫し、内容も現状にそぐわないものになったため、約1年半前から計画の練り直しを始めた。

職員らも意識を変えた。10年前までは、職員全体に公務員的な雰囲気があった「二宅隆雄」が、04年度は79種類のイベントを開いた。海外の動物園で研修を受けたり、休日にも他園へ行ったりと、研究にも余念がない。

■改革

改革の目玉の一つが、園内5種類の猛獣を一室に集めた「猛獣館（仮称）」。

動物本来の生き生きとした姿を見せる「行動展示」と「4年毎の展示」を導入する。「猛獣館」では、ライオンならサバンナ、ピューマならアリゾナの砂漠と、それぞれの生息環境を再現。ピューマの跳躍力を発揮できるように高い柵場を作るなど、動物の能力を引き出せる工夫も加える。

「動物園（新）整備基本計画」を導き出した。動物本来の生き生きとした姿を見せる「行動展示」と「4年毎の展示」を導入する。「猛獣館」では、ライオンならサバンナ、ピューマならアリゾナの砂漠と、それぞれの生息環境を再現。ピューマの跳躍力を発揮できるように高い柵場を作るなど、動物の能力を引き出せる工夫も加える。

また、市民アンケートの結果を受け、雨をしのげる屋根付き休憩所、食卓や売店などを増やし、06年度中には現在の展望園地を芝生広場に整備する。

園長も頭を悩ませている。園内5種類の猛獣を一室に集めた「猛獣館（仮称）」。

レポート

園長も頭を悩ませている。園内5種類の猛獣を一室に集めた「猛獣館（仮称）」。

園長も頭を悩ませている。園内5種類の猛獣を一室に集めた「猛獣館（仮称）」。

園長も頭を悩ませている。園内5種類の猛獣を一室に集めた「猛獣館（仮称）」。

園長も頭を悩ませている。園内5種類の猛獣を一室に集めた「猛獣館（仮称）」。

園長も頭を悩ませている。園内5種類の猛獣を一室に集めた「猛獣館（仮称）」。

園長も頭を悩ませている。園内5種類の猛獣を一室に集めた「猛獣館（仮称）」。

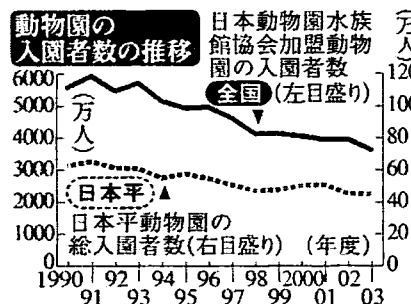
園長も頭を悩ませている。園内5種類の猛獣を一室に集めた「猛獣館（仮称）」。

園長も頭を悩ませている。園内5種類の猛獣を一室に集めた「猛獣館（仮称）」。



ゾウをバックに記念撮影する親子連れ（静岡市駿河区池田の日本平動物園で）

どう人気回復



旭山が導入したのは、動物本来の行動や能力を見せる「行動展示」、動物の生息する自然に近い状態で見せる「生態的展示」。従来の、ただオリの中で見せるだけの「形態展示」から発展した展示法で、世界の動物園の流れでもある。

旭山が導入したのは、動物本来の行動や能力を見せる「行動展示」、動物の生息する自然に近い状態で見せる「生態的展示」。従来の、ただオリの中で見せるだけの「形態展示」から発展した展示法で、世界の動物園の流れでもある。

北海道・旭山 見せ方工夫で成功

入園者の減少傾向は日本平だけの問題ではなく、全国の動物園が改革を模索している。水中トンネルの中を飛ぶように泳ぐペンギン。地上高く張ったロープをつたって空中散歩するオランウータン

500円で年間何度でも利用できる「動物園パスポート」、開園時間を午後9時まで延長する「夜の動物園」など、旭山はサービスマンの改革も合わせて打ち出し、入園者増につ

備を進めている。園は、2002年から動物の餌代を市民から募る「動物園サポーター」制度を日本で初めて導入。上野動物園や多摩動物公園なども後に続き、日本平でも準備を進めている。

有識者の懇談会を設置し、経営改革を進めている。懇談会は昨年4月、3園の業務提携や営業・投資戦略の見直しな

は段階的縮小」とした。日本動物園水族館協会の北村健一専務理事は「旭山に追随して、各地の動物園で様々な改革が行われているが、最終的には市民の応援を得られるかがカギ」と話し、日本平の改革にも注目している。

ライオンレポート



行政改革に詳しく、「横浜市立動物園のあり方懇談会」座長を務めた上山信一・慶応大教授(公共経営)に、今後の動物園の進むべき方向を聞いた。

動物を購入したり、繁殖施設を整備したり、動物園経営はもともとコストがかかる。広い土地も必要で、都心につくれない。雨の日や冬など客が入らない時も多く、経営効率が悪い。

慶応大 上山信一教授

民間感覚で行政改革を

何より展示物は生き物で、えさを食べれば、ふんもするし、やがて死ぬ。とはいえず、動物園は、博物館や美術館などに比べれば、はるかに経営努力をしていると言ってもいい。

動物園はむしろ常識に立ち返るべきだ。よく「人は人生で動物園に3回行く」と言われる。幼稚園の時、子が幼稚園に行った時、孫が幼稚園に行った時の3回だ。要は、今までは小さな子供しかターゲットにしてこなかったわけ

延長線としてデートや環境教育の場としても使われている。都市型公園なら、夜間の開園や入場料の弾力化など工夫も必要だ。また、動物園で一番面白いのは専門家である飼育員。飼育員はもっと入園者に語りかけなければいけない。それは、民間的な経営に変えていくことにもつながる。

ていく中で、旭山は老朽化した施設を一新して成功した。かといって、旭山をマネするだけでは意味がない。旭山の改革は規模が小さいからできたこと。規模の大きな動物園が同様のことをしようとするれば巨額の費用がかかる。財政難の自治体にそんな余裕はない。

で、それを改めるべきだ。公立動物園には今まで、営業という発想がなかった。民間の市場調査のプロを招くだけでもだいぶ違ってくる。もう一つはバリアフリーへの投資だ。高齢者などが、広い園内を見られるように、電動力

海外では、動物園は公園のただだ。全国の先進事例を研究すれば、旭山のように見直すべき余地は多くあるはず。問題はそれを継続できるかだ。金の使い方や人、組織が変わらないといけない。公立動物園ならば、結局、行政改革が必要になってくる。ただ頑張り続けても、現場が疲れていくだけだ。